

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

おばあちゃんとのやり取り

神奈川県 聖ヨゼフ学園中学校 三学年

木村 帆花

「ハンカチは持ったの。」

「ティッシュは持ったの。」

「宿題は、折りたたみ傘は持ったの。」

「定期は持ったの。」

と、おばあちゃん。

「持ったよ。」

と、私。毎朝、玄関先で繰り広げられるこのやり取り。正直、毎日のことなので答えるのが億劫になる時もある。『聞かれなくたって忘れないよ』と思う日もある。

しかし、いつかの私はこのやり取りに助けられた。その日もいつもと同じように

「定期は持ったの。」

と聞かれた。だから、私もいつもと同じように『持ったよ。』と答えようとした。が、答えられなかった。前日に出掛けていて、その時に使ったかばんに入れっぱなしにしまっていたのだった。つまり、今持っているのは学校のかばんなので、私は定期を持っていなかった。おばあちゃんとのやり取りの中でそのことに気が付いた私は、定期を取りに、降りてきたばかりの階段を駆け上がった。

いつもなら少々面倒に感じるおばあちゃんとのやり取りも、この時はとてもありがたく思った。もし、おばあちゃんが聞いていなかったら、私は定期を持っていないことに気付かないままバスに乗ろうとしていただろう。そして、そこでやっど定期を持っていないことに気が付いて、慌てながらお金を出し、バスを待たせてしまったことだろう。他の乗客の方々にも迷惑をかけてしまったことだろう。それに、私も恥ずかしくなり、気まずい思いをしていたはずだ。おばあちゃんとのやり取りは、私をそんな状況から救ってくれたのだ。

その時、私は思った。毎朝のおばあちゃんとのやり取りと生命保険は同じようなものではないかと。中学生が定期を忘れそうになつた話と生命保険は全然違う。しかし、私はこの件で生命保険の仕組

第55回中学生作文コンクール

みを身近に感じた。おばあちゃんとのやり取りが保険料で、定期を忘れていることに気付かせてくれたことが保険金を受け取った時だと考える。すると、私は、毎朝おばあちゃんと話すことで、忘れものをするというリスクに対策を取っていたことになる。私は、そのことを意識しておばあちゃんと話していたわけではないが、大人は、そういったことを意識して保険に入っているのだということに気が付いた。

世の中に“絶対”は存在しない。しかし、“もしも”は存在する。人々は、その“もしも”の時に備えて保険に加入する。自分の大切なものを守るために保険が存在する。そのことに気が付いたら、道行く大人たちの背中が少し大きく見えた。そして、私がおばあちゃんになっただら、

「定期は持ったの。」

と、毎朝、孫に聞こう。例え面倒に思われたとしても、それで孫のピンチを助けられるのなら、それもまた保険だろう。だから、私はおばあちゃんに元氣良く言うのだ。

「行ってきます！」